

梶原厚子

さん

●株式会社スペースなる 代表

目指すものはインクルーシブケア！
医療デバイスを必要とする重篤な状態でもなくとも、訪問看護を必要とする子どもはたくさんいます

近年医療の進歩によって、重い疾患でも命を救われる子どもが増えている。しかし、こうした医療的ケア児が退院して家庭で生活するには、家族の負担も大きい。そんな状況下、梶原厚子さんは、長年医療的ケア児の訪問看護に携わってきた。そして、多くの現場で経験を積んだのち、株式会社スペースなるを設立し、地域との連携の中で子どもや家族が生き生きと暮らせるための支援を続けている。そんな梶原さんに支援への思いを伺った。

●取材文……白井美樹(ライター)

救急医療の現場を経験し 訪問看護の必要性を認識

梶原さんが看護師になったのは、今から38年前。ちょうど救急救命センターが全国に配置されたころだった。新しい医療のもつて働きたかった梶原さんは、最初の職場として救急医療の現場を選択する。しかし、そこで働いているうちに、ある疑問が頭をもたげてきたのだという。

「1〜2年目のときは、救急で運ばれてき

「いろいろな面接をした末に、在宅看護や介護、家事などの福祉サービスを提供している松山市内の会社に就職することにしました。介護保険が始まる直前には、この会社で訪問看護ステーションが設立され、所長となって訪問看護を始めたのです」

訪問看護の対象者は、明らかに高齢者が多かった。しかし、そんな中でも、重い障害のある子どもの看護サービスに向く機

会もあった。そうした子どもに出会うにつけ、医療的ケア児の支援の重要性を認識するようになっていったという。

「特別支援学校に通っている子どもは、お母さんが病気になる就送迎ができなくなり、学校に行けずに家に閉じこもらないといけませんでした。そうした状況を目の当たりにして、小児の訪問看護をしっかりとやらないといけないという使命感のようなも

た患者さんが、命を取り留めて退院できると、ただ単に『よかった!』と思っただけ。でも、3年目くらいになると、命は助かったものの、認知症や障害を持った状態で退院していく患者さんを見て、『このまま家庭に帰ることになって本当によかったのかしら?』と思うようになりました」

梶原さんが感じたのは、「この先は、実際に患者さんの家に行ってみないと分からないかもしれない」ということだった。当時は、まだ訪問看護ステーションというし

くみはなかったが、訪問看護に大きな関心を抱くようになったきっかけが、この急性期医療の現場にあったのではないかといい。

その後、ご主人の仕事の関係で、愛媛県に転居した梶原さんは、愛媛大学医学部付属病院に勤務。しかし、2人のお子さんを妊娠、出産することになり、しばらく仕事から離れることになる。そして、再び仕事に戻るときに決意したのが、「訪問看護師になろう」ということだった。

のを感じるようになりましたね」

そんな梶原さんの意志が反映され、同会社では、2009(平成21)年に医療ケアが必要な子どもが通えるデイサービスを開設。訪問看護と併せて、医療的ケア児の支援が大きく前進した。ここで経験を培ったことで、梶原さん自身は、小児若年層の障害に対する理解を深めることができたという。

小児専門の訪問看護を提供する診療所の勤務で経験を積む

松山市において、キャリアを積んだ梶原

Profile

●かじわら・あつこ●

1982年、済生会宇都宮病院付属看護専門学校卒業。済生会宇都宮病院・獨協医科大学付属越谷病院・愛媛大学医学部付属病院勤務。1996年(株)クロス・サービス福祉事業部ケアサポートまつやま勤務。2000年、同法人にて訪問看護ステーションほのか・居宅介護支援事業所開所。2009年、同法人にてほのかおひさま児童デイサービス開所。2012年、医療法人財団はるたか会勤務。訪問看護ステーションそら、訪問看護ステーションあおぞら(新松戸・京都)、あおぞら診療所(墨田・新松戸)。2013年、一般社団法人日本小児看護学会診療報酬検討委員。



さんが首都圏に戻ったのは、東日本大震災の後だった。関東に住む実家のご両親から戻ってきたらという要望があり、ご主人の仕事も東京中心となっていたからだ。

新しい勤務先は、小児科医の前田浩利氏が理事長を務める、医療法人財団はるたか会だった。

「以前、前田医師は何度も松山市を訪れ、私が勤める訪問看護ステーションなどを見学に来たことがありました。先生は、その現場を見て、『医師がいないのに、どうしてこんなに重症の子どもまで在宅で診ることができるの?』と、私たちのケアシステムにびつくりされていました。そんな交流があったので、私が戻るときに『一緒にやりませんか』と誘ってくださったのです」

看護・リハビリ部門の統括管理をする看護師として、入職した梶原さん。何か所もある診療所のうち、子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田に勤務していたときには、都内を広く網羅した子どもの訪問看護についておおいに学ぶことができたそうだ。

この診療所は、日本で初めて子ども専門の訪問診療の提供を始めた診療所だったが、6年間勤務したころには、ほかにも子

この事業では、介護保険のようにケアマネジャーがいなくても、看護師だけで十分なケアができることを理解してほしいという。また、近年の児童福祉法の改正などにより、地域で医療的ケア児の支援体制が整ってきている中、支援の社会資源がまだまだ足りていないので、その点での人材育成も見据えているのだ。

梶原さんは地域支援事業がやっていていちばん楽しいと言う。

「学校の先生、保育士、相談支援専門員など多職種の方々を集めて、2か月に1回くらい勉強会やケースワークなどを行ってあります。いくなれば、支援者を支援する会です。人のネットワークがあれば、支援が届きやすくなりますし、災害時などの助け合いもできるようになります」

会社設立前は、医療事業に振り回されていて、もともとやりたかった地域支援がなかなかできなかったが、今そのことが実現できている。

そして、梶原さんは保健師と活動を共にする機会も多い。在宅訪問の同行や、病院から小児が退院

ども専門の訪問看護ステーションが次第に増えてきていた。そんな時流をみて、梶原さんは一定の使命は終わったのではないかと感じ、次へのステップを踏み出す。現在代表を務める「株式会社スペースなる」の創設である。

「あおぞら診療所は、まずは診療ありきで、医療機関からの紹介も多く、ほとんどが医療デバイスが必要としました。しかし、そこまで重篤な状態でなくても、訪問看護を必要とする子どもはたくさんいます。医療機器を用いなくても、健康レベルを上げていくこともできるはずですよ」

そうなると、看護師だけで開業したほうが幅広い看護ができるのではないかと思いましたが。私は最終的には「小児の訪問看護にはこういうことが大切」ということを具現化したかったので、自分が経営者となってやらないといけないと思ったのです」

3本立てで事業を展開する「スペースなる」の代表に

会社のオフィスは迷わず、東京の多摩地区に置くことにした。緑が多く自然環境に恵まれていることもあるが、子ども病院も多くて療育、治療が整っている地区である

するときのケア会議には、必ず地区担当の保健師さんが同席する。

「まだまだ現況では、未就学児などに対するヘルパーさんの割り当ても足りていません。そういう場面で保健師さんは、お母さんたちがもつと楽になれるシステムやサービスのことを教えてあげることができず、ジレンマを感じることも多いかもしれません。保健師さんは多忙で頻繁に訪問ができないこともあると思います。そういうときには私たちが訪問しますので、医療保険のサービスでこういうふうにお母さんをサ

ことがその理由だ。

雇用契約のスタッフは12名ほど。看護大学で小児看護を専門とする看護師2名に月4回来てもらって、新しい医学の知識も学ばせてもらっている。

訪問看護でケアするのは、半数くらいは医療デバイスが必要としない小児。体調が安定しているときは月2回くらいは訪問にとどめ、その代わり風邪をひいたり体調が悪化したりしたときには、吸引などの医療的ケアが必要になるので、密に外向く。そのほか食べ方の工夫を指導したり、姿勢や環境調整にも重きを置いている。

ところで、梶原さんがやりたかったことは、「訪問看護事業」だけではない。そのほかに、「研究研修事業」、「子ども等地域支援事業」の3本立てで運営している。

「研究研修事業では、看護師の方や、福祉・教育などに関わる方が、医療的ケア児によりよい関わり方ができるように研修を行い、暮らしの中のさまざまな課題の研究も行っています。また、この事業の一環として椅子作りの事業所と共に、赤ちゃんの椅子の開発・製品化を行いました。なかなか医療的ケアが必要な赤ちゃんが座れる椅子がこれまでなかったからです」

ポートしたらということ、あらかじめ明確に伝えていただけると助かります。

また、私たちが逆に情報提供することもあります。そんなときは、情報提供書にスムーズに目を通せる流れができて、地域の連携の仕方はつきりと示してくれると有難いですね。この多摩地区の保健師さんたちは、みんないい人たちばかりで、とても頑張ってくれていると思います」



会社案内のリーフレットには「小さな葉でも、あつまればなんとかなる」と、社名の由来を表現したロゴマークと、スペシャルニーズを持った小学生が描いたという絵が見える。インクルーシブケアを目指すスペースなるの理念は同社の公式サイトでも詳しく紹介されています。
<http://space-naru.com>